

看護の専門性に関する考察

宇野 点子

1. 目的

看護の専門性は、長い間「療養上の世話」にあるといわれてきたが、近年では、看護の専門性を「診療の補助」業務に求める議論が出てきている。そこで、看護の専門性に関する議論にこうした変化をもたらしている社会的歴史的背景を明らかにし、あらためて看護の専門性について考察することを目的とする。

2. 方法

明治期の近代看護成立期から現在に至るまでの歴史、看護政策、看護師の置かれている状況、看護における環境の変化とともに生じてくる専門性に関する議論と諸問題を時系列で述べ、看護の専門性が「療養上の世話」とされた経緯と、看護の専門性を「診療の補助」に求めることによって生じる新たな問題を抽出する。

3. 結果

- ・戦前日本の病院は独特な発展をし、医療色が強く、ケアが未発達であった。戦後も多忙であることや、看護への理解が不十分などの理由で、理念としての看護の実践を許さない職場環境が歴史的に形成されてきた。さらに、私的病院が生き残りをかけて高齢者を社会的入院という形で取り込んでいくことになり、ケアが確立していない病院が、ケアを最も必要とする多数の高齢者を入院させることになった。しかも、国が削減策や機能分化によって、社会的入院を削減させようとするが、複合体形成によって病院と高齢者がつながり続ける構造が構築された。
- ・「理念としての看護」が何であるかという具体的行為（本質的なケア）の形成と実践が実現しなかった。看護学が確立していない時期に、高齢者に対して、不適切な排泄ケアや身体拘束が行われてしまい、本質的なケアとして確立しなかった。そうした経緯が、介護士達に介護として引き継がれていくことになり、介護の独自性や専門性の確立を阻害することになった。
- ・理念としての看護実践の経験と共有がなく、価値の共有ができずにいる。しかも、価値が認められていないから、看護の領域から本質的なケアが閉め出されていて、専門性の議論に組み込まれない。その結果、専門職となり得るための要件や、現状を肯定し専門性に組み込むといった議論が登場することになる。一方で、急性期病院で他の施設より高率で不適切な排泄ケアや身体拘束が行われ、寝たきりや認知症を生み出す原因となっている。
- ・介護士や医師の一部がおむつ外しなどの取り組みを行い、改善がみられているが、病院での身体拘束や安易なおむつ装着の問題が手つかずのままになっている。しかも、それが尊厳死の議論を引き起こす原因になっている。

4. 結論

以上から、看護の専門性に関する議論が理念から離れて議論されるようになった結果、官僚制化の進展は労働の疎外を生み出し、多くの看護師と高齢者を苦しめることとなった。佐藤慶幸は、専門職を規範的な立場から定義するのは、第一に、本来人類・社会に奉仕すべき専門職が、問題を生み出してきたことへの弾効である、第二に、専門職業者自身がそれに内在する理念に基づいて行動するとき、かえってその理念と現実との乖離を認識し、クライアントないし市民との連帯関係を生み出し、それが社会変革をもたらさうからとしている。佐藤が指摘するように、私たちは、声なき高齢者に向き合わなくてはならない。そのために何度でも理念に立ち返り、理念としての看護の実践を諦めないことが必要なのではないだろうか。

参考文献

- 佐藤慶幸、『官僚制の社会学』、1966、文真堂
- 天野正子、『看護婦の労働と意識：半専門職の専門職化に関する事例研究』、1972、社会学評論
- 津村 修、『職業社会学における「専門職」概念に関する考察』、1987、名古屋大学社会学論集第8号